

課題番号 : 27指1403  
研究課題名 : 東日本大震災における被災児童の前向き追跡研究および被災児童の心的外傷後ストレス障害 (PTSD) に関する研究  
主任研究者名 : 牛島洋景  
分担研究者名 : 渡部京太、宇佐美政英、岩垂喜貴  
鈴木友理子 (国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所)  
佐竹直子 (国立精神・神経医療研究センター病院)  
キーワード : 東日本大震災, 外傷後ストレス障害, 前向き追跡研究, 連携システム

研究成果 :

本研究は東日本大震災に被災した石巻市の児童の、被災の経過を明らかにすること、外傷を受けた子どもへの標準的な治療を実施しその有効性を明らかにすること、地域精神保健ネットワークの構築をめざすものであり、初年度の研究成果概要は以下のとおりである。

【石巻市の被災児童の前向き追跡研究】健康調査 (①PTSSC 15 (富永ら, 2002)、②生活習慣調査 (睡眠習慣および朝食摂取の有無に関するもの) の結果からは、PTSD 関連症状が改善する中で、仲間関係の問題が悪化する傾向が明らかとなった。追跡研究でみられた PTSSC-15 の経年変化が、被災から時間が経過したことによって起こる変化なのか、通常の発達的变化なのかについて明らかにすることを目的とし、同様な調査を市川市で3年間行うことを決定した。現在、市川市教育委員会の承諾を得て、倫理委員会で審議中である。

【被災地の保健行政からみた被災児童の精神保健に関する研究】3つの領域についての研究を行った。第一に精神的な問題を抱えて石巻市の福祉課を訪れた親子についてのコンサルテーションを行うために調査をおこない、各領域の専門家からアドバイスを求められた。第二に毎日の生活の中で精神的な問題や困難を抱えた子どものスクリーニングを行うための質問紙を開発した。その質問紙を2200名の小学生に行い、その効果を解析した。第三に、精神的な問題を抱えた親子のサポートネットワークのスーパーバイズを行い、より良ネットワーク作りのための提案を行った。

【被災児童に発症する精神障害の有病率に関する研究】文献検索と調査内容の決定、調査準備のための地元関係機関との調節を行った。その結果、石巻市立石巻中学校、石巻市立門脇中学校を調査対象とし、調査基本表を用いてデモグラフィックデータを収集、抑うつ、不安、PTSD 関連症状、子どもの反抗挑戦性に関するアンケート調査を行い、調査票を配布・回収後、7月11日から15日に、スクリーニング面接及び構造化面接を行うこととした。

【支援を行った被災児童の追跡研究】「子ども支援関係者会議」の目的は、①石巻市の問題を抱える子どもへの支援を行うために、関係する諸機関が集まり、問題を抱える子ども、家族に関する情報交換を行い、よりよい支援を検討し、提供することである。平成27年度は、8事例について検討し、さらに「子ども支援関係者会議」の今後のあり方についても検討を行った。平成27年度に「子ども支援関係者会議」で検討した結果、養育機能の悪い家庭の不登校事例、そして虐待事例についての検討が増えていくことが予想される。「子ども支援関係者会議」への石巻市の精神科医や小児科医の参加を呼びかけ、地元の子どもの関わる医師がスーパーバイザーの役割をとれるように働きかけていくことが望ましいと考えられた。

【外傷 (トラウマ) を受けた子どもの治療技法の有効性に関する研究】トラウマ焦点化認知行動療法の有効性を検証するために、4症例のエントリーを行い、1症例について治療を完了、1症例について治療を継続中であるが、2症例は中断となっている。治療効果の検証は、UCLA 心的外傷後ストレス障害インデックス (UPID)、バールソン子どもの抑うつ評価スケール (DSRS)、スペンサー子どもの不安スケール (SCAS) を用いて行った。終了ケースではいずれのスケールでも改善を認めている。

Subject No. : 27-1403

Title : A prospective cohort study of children suffering from the Tohoku Region Pacific Coast Earthquake and a study about children with Post Traumatic Stress Disorder (PTSD)

Chief Researcher : Ushijima Hirokage

Assigned Researchers : Usami Masahide, Iwadare Yoshitaka, Satake Naoko, Watanabe Kyota , Suzuki Yuriko

Key Words : Tohoku Region Pacific Coast Earthquake, posttraumatic stress disorder, prevalence survey, prospective longitudinal study, support services for children

Abstract: This study was conducted as a prospective cohort study in Ishinomaki city. And we conducted a standard treatment for children with PTSD and examined the effectiveness of that treatment procedure. This study also developed a support system for the children in cooperation with Ishinomaki city. 【The Prospective Longitudinal Study】 From the result of health survey (PSTCC-15 (The Posttraumatic Stress Symptoms for Children 15 items) and SDQ (Strengths and Difficulties Questionnaire)), we revealed as below : ①The scores of PTSSC-15 were improved. ②The problem of peer relationship became apparent. We could not estimate that these change mean temporal change or developmental change. So we set up the same health survey in Ichikawa city where is non affected area. This survey is now assessed by ethic committee. In addition, we designed the prevalence study of psychiatric disorder of children in Ishinomaki city. We had meeting with two junior high school and Ishinomaki education committee and fixed the date of survey. 【The survey of treatment for children with PTSD】We provided Trauma Focused-Cognitive Behavior Therapy (TF-CBT) to 4 cases and one of 4 cases finished TF-CBT protocol. In this case, symptom of PTSD, depressive mood and anxiety improved. 【The Study for Mental Support Services Establishment】 We surveyed all children and mothers with mental problem who visited department of public health and welfare in Ishinomaki city hall to consult or were referred by the other professionals about their variation of problem and their background. And we developed the screening questionnaires to catch the children with mental problem or difficult condition in their daily life early and analyzed the effectiveness of it. As the third project, we supervised support network system of child-mother with mental problems and made recommendation how to improve the function. In addition, we provide “Children Supporters’ Meeting” on children having difficulties in Ishinomaki. We examined over 8

cases and we also thrashed out what “Children Supporters’ Meeting” should be. Through our examinations, it is desirable that we work on psychiatrists and pediatricians in Ishinomaki City to attend the meeting to be supervisors relating local children.

## 27指 1403 【3年研究 1年目】

# 東日本大震災における被災児童の前向き追跡研究および被災児童の心的外傷後ストレス障害（PTSD）に関する研究

### 石巻市の被災児童の前向き追跡研究

- ① 石巻市の被災児童の前向き研究  
健康調査を継続的に施行し、その変化を追跡。
- ② 石巻市の被災児童と健常児の比較研究  
千葉県内で健康調査を施行し、被災児と非被災児の比較検討を行う。
- ③ 被災地の精神保健行政からみた被災児童の精神保健に関する研究  
養育能力の低い家庭で育った子どもへの東日本大震災が与えた影響を検討し、その支援を構築する。
- ④ 支援を行った被災児童の追跡研究

### 石巻市の被災児童に発症する精神障害の有病率に関する研究

被災児童に構造化面接を行い、発症する心的外傷ストレス障害(PTSD) といった精神障害の有病率とそのリスク要因を調査。

### 外傷（トラウマ）を受けた子どもの治療技法の有効性に関する研究

外傷への標準的な治療技法を施行し、その有効性を検討



### 期待される成果

- ① 被災児童、支援した子どもの経過を明らかにできる
- ② 被災児童に発症する精神障害の有病率、リスク要因を明らかにできる
- ③ 外傷を受けた子どもへの標準的治療を施行し、その有効性を検討する

## 27指 1403 【3年研究1年目】 平成27年度（研究1年目）成果

### 石巻市の被災児童の前向き追跡研究

健康調査（①PTSSC 15（富永ら, 2002）、②生活習慣調査（睡眠習慣および朝食摂取の有無に関するもの）の結果からは、PTSD関連症状が改善する中で、仲間関係の問題が悪化する傾向が明らかとなった。追跡研究でみられたPTSSC-15の経年変化が、被災から時間が経過したことによって起こる変化なのか、通常の発達的变化なのかについて明らかにすることを目的とし、同様な調査を市川市で3年間行うことを決定した。現在、市川市教育委員会の承諾を得て、倫理委員会で審議中である。

「子ども支援関係者会議」の目的は、①石巻市の問題を抱える子どもへの支援を行うために、関係する諸機関が集まり、問題を抱える子ども、家族に関する情報交換を行い、よりよい支援を検討し、提供することである。平成27年度は、8事例について検討し、さらに「子ども支援関係者会議」の今後のあり方についても検討を行った。平成27年度に「子ども支援関係者会議」で検討した結果、養育機能の悪い家庭の不登校事例、そして虐待事例についての検討が増えていくことが予想される。「子ども支援関係者会議」への石巻市の精神科医や小児科医の参加を呼びかけ、地元の子どもの関わる医師がスーパーバイザーの役割をとれるように働きかけていくことが望ましいと考えられた。z

### 石巻市の被災児童に発症する精神障害の有病率に関する研究

文献検索と調査内容の決定、調査準備のための地元関係機関との調節を行った。その結果、石巻市立石巻中学校、石巻市立門脇中学校を調査対象とし、調査基本表を用いてデモグラフィックデータを収集、抑うつ、不安、PTSD関連症状、子どもの反抗挑戦性に関してのアンケート調査を行い、調査票を配布・回収後、7月11日から15日に、スクリーニング面接及び構造化面接を行うこととした。

### 外傷（トラウマ）を受けた子どもの治療技法の有効性に関する研究

トラウマ焦点化認知行動療法の有効性を検証するために、4症例のエントリーを行い、1症例について治療を完了、1症例について治療を継続中であるが、2症例は中断となっている。治療効果の検証は、UCLA心的外傷後ストレス障害インデックス（UPID）、バールソン子どもの抑うつス評価スケール（DSRS）、スペンサー子どもの不安スケール（SCAS）を用いて行った。終了ケースではいずれのスケールでも改善を認めている。

# 被災児童に発症する精神障害の有病率に関する研究 平成27年度

## 1年目計画 調査の準備

- 先行研究を十分に検討
- 調査内容を決定
- 石巻市および対象地区に計画を説明し調査協力を依頼し、調査日の決定を行う
- スクリーニング、構造化面接を行う、臨床心理士と医師に対する講習会を実施

## 実施内容

- 石巻市教育委員会と協議し調査内容を検討。
- 調査対象校を石巻市立石巻中学校と門脇中学校と決定。
- 調査日を28年7月11日から15日と決定。
- 両校のPTA総会にて調査内容の説明を行う。
- 面接調査参加者を調節した。

## 2年目の計画

- 面接調査参加者に面接方法の確認を行う。
- 石巻市での調査を実施する。
- 結果を学会で報告し論文を作成する。
- 3年目に調査を行う小学校の対象校を決定する。



# 石巻市の被災児童の心的外傷に関する横断研究

分担研究者：宇佐美政英

目的：被災児童のトラウマ症状の推移とその予測因子を明らかにすること

東日本大震災



対象：石巻市の幼稚園、小学校、中学校、高校に在籍する全児童

Nov/2011 施行済み

1-4年後調査

トラウマに関する質問紙

被災状況  
離別体験の有無

論文

研究  
一年目

2015年施行予定

5年後調査

トラウマに関する質問紙

上記結果から被災状況とその後のトラウマ症状の推移に関する考察

論文

研究  
二年目

2016年施行予定

6年後調査

トラウマに関する質問紙

上記結果から被災状況とその後のトラウマ症状の推移に関する考察

論文

研究  
三年目

2017年施行予定

7年後調査

トラウマに関する質問紙

上記結果から被災状況とその後のトラウマ症状の推移に関する考察

論文

期待される結果：7年間の前向き研究によって、子どものトラウマ症状の関与する要因（被災状況や離別体験の有無）を明らかにすることができる。

投稿準備中

論文

期待される成果



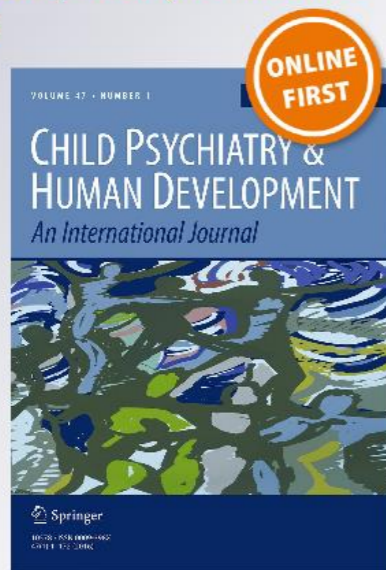
# 本年度の成果

The PTSSC-15 total scores of high school girls with traumatic experience were significantly higher than the scores of children with- out these experiences (all  $p < 0.0001$ ). The PTSSC-15 total score did not decrease significantly over time. Furthermore, the PTSD subscale of the PTSSC-15 did not significantly improved over the study duration. However, the depression subscale of the PTSSC-15 significantly improved at 30 months, but significantly worsened at 42 months (both  $p < 0.0001$ ). This study demonstrates that the traumatic symptoms of high school girls who survived the massive tsunami fluctuated unpredictably with time. Nonetheless, high school girls continued to suffer depressive symptoms (Usami et al., 2016)

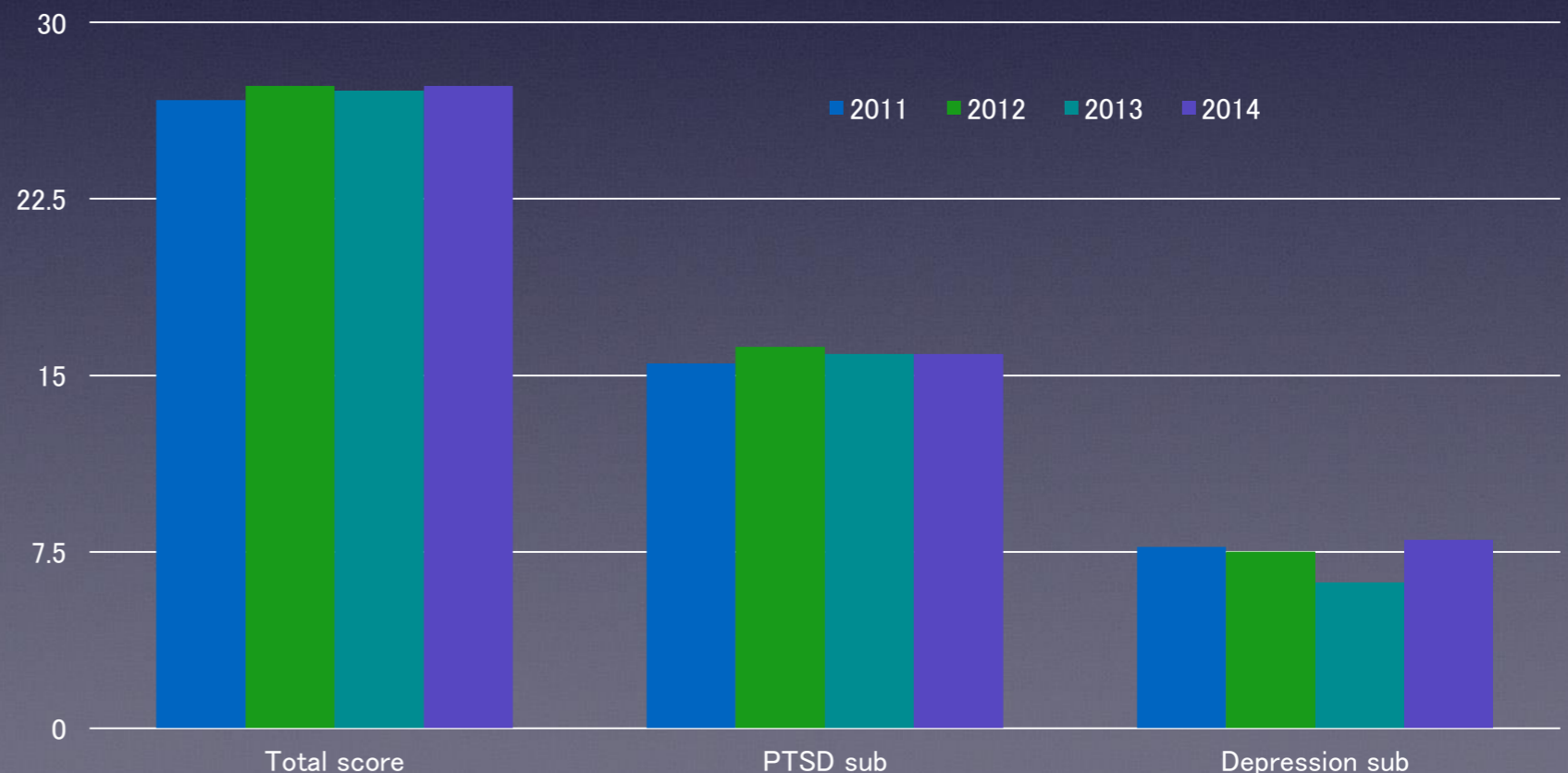
*Long-Term Fluctuations in Traumatic Symptoms of High School Girls Who Survived from the 2011 Japan Tsunami: Series of Questionnaire-Based Cross-Sectional Surveys*

**Masahide Usami, Yoshitaka Iwadare, Kyota Watanabe, Masaki Kodaira, Hirokage Ushijima, Tetsuya Tanaka & Kazuhiko Saito**

Child Psychiatry & Human Development  
ISSN 0009-398X  
Child Psychiatry Hum Dev  
DOI 10.1007/s10578-016-0631-x



Springer





# 宮城県石巻市における東関東大震災 被災児童（小学生）の追跡調査

## 【目的/調査内容】

本研究は東日本大震災の被災を経験した石巻市内における小中学生年代の子ども達と千葉県内の公立小中学生の子ども達との健康状態を比較するものである。調査尺度としては子ども版災害後ストレス反応尺度(PTSSC-15)と、生活習慣調査（睡眠時間および朝食摂取の有無について）を用いる。時間の経過、発達にともなう得点の推移、傾向の記述を行う。これは、過去に石巻市で得られた震災からの時間経過に伴う得点の推移が（Iwadare,et al.,2014; Usami,et al.,2014）、被災からの時間の経過によるものなのか、発達に伴う通常の変化なのかを検討するためである。非被災地において同じ質問紙を用いた調査を3年間継続して実施することで、得点の推移、傾向を記述し、以下の点を比較する。

**1).子どもの自己評価によるストレス反応（PTSSC-15）の得点の推移** 本尺度はPTSD（8項目）と「抑うつ（7項目）」の2つの下位尺度から構成され、心的外傷後ストレス障害(post traumatic stress disorder : PTSD)だけに限定されない反応がスクリーニングできる。主に自然災害や人為災害後に、学校現場などの集団で個別ケアを要する児童の一次的スクリーニングに使用する。心理的抵抗に配慮し、施工時にトラウマ体験の想起は求めず、10分程度で終わる。

【子ども版災害後ストレス反応速度(Post Traumatic Symptoms Scale for Children-15 : PTSSC-15)】本尺度はPTSD（8項目）と「抑うつ（7項目）」の2つの下位尺度から構成され、心的外傷後ストレス障害(post traumatic stress disorder : PTSD)だけに限定されない反応がスクリーニングできる。主に自然災害や人為災害後に、学校現場などの集団で個別ケアを要する児童の一次的スクリーニングに使用する。心理的抵抗に配慮し、施工時にトラウマ体験の想起は求めず、10分程度で終わる。

**2). 【生活習慣調査】** 「睡眠習慣」および「朝食摂取の有無について」の新たに作成した質問紙を使用する。

## 【調査対象】

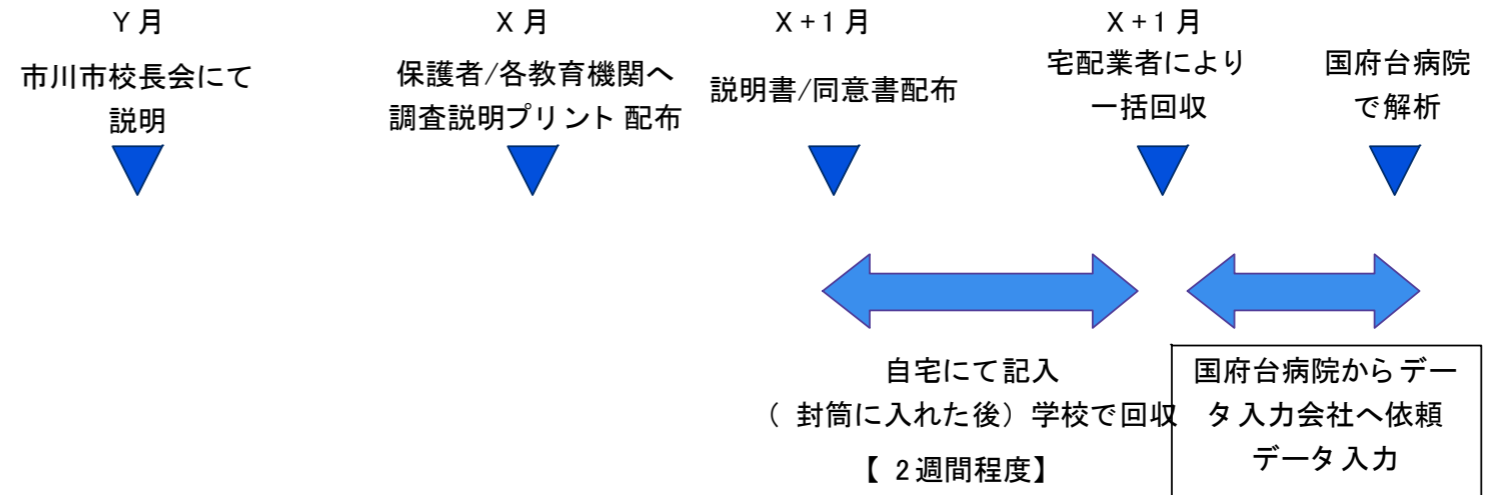
石巻市：小中学生全数調査

千葉県市川市：1年目に小学4年生と中学1年生を対象とし、3年間追跡する。

## 【解析方法】

以下の項目について、地域別に3年間の記述を行う。1) PTSSC-15の得点の推移 2) 睡眠時間および朝食摂取の有無の変化 以上をアウトカムとして、主な統計値（平均値、中央値など）を地域別に記述する。これらの時点、地域別の差異については、ANCOVAを用いて検討する。

## 【研究方法】



千葉県市川市教育委員会担当者および国府台病院担当者により本調査の説明を校長会で行う。

保護者および教育機関用の研究説明書（「研究のお願い（別添8および9）」）の配布を国府台病院児童精神科より行う。（国府台病院より各教育機関へ用紙を配布する）

国府台病院児童精神科より本人および保護者に対しての説明文書、同意書および調査用紙の配布を各教育機関に対して行う

調査用紙には学校IDのみが記載されており、個人情報は一切記載されていないものを用いる。

一斉配布後、2週間後後に教育機関にて用紙の一括回収を行う。

調査用紙を国府台病院へ郵送する。

データ入力は外注しデジタルデータ化する。解析は国府台病院児童精神科および国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所で行う。

解析結果を千葉県市川市教育委員会へ提供する。

## 【本年度の成果】

当初千葉県内の小中学校において本調査を行う予定であったが、関係教育機関の許可が下りず千葉県市川市内の教育機関での調査に変更になった。そのため倫理委員会の書類などを再作成し研究を進めている段階である。

課題番号 : 27指1403  
研究課題名 : 東日本大震災における被災児童の前向き追跡研究および被災児童の心的外傷後ストレス障害 (PTSD) に関する研究  
被災地の保健行政からみた被災児童の精神保健に関する研究  
主任研究者名 : 牛島洋景  
分担研究者名 : 佐竹直子

キーワード : 被災地 保健行政 母子 連携システム  
研究成果 : 本分担研究では、先行研究 (国際医療開発研究事業渡部班 H25-27 年) に続き、東日本大震災によって被災した宮城県石巻市 (以下同市) 在住の児童の精神保健的な問題への保健行政による関与について実態調査を3年間行う。また、被災地での子どもと母親への地域支援ネットワークシステムのありかたについて検討、更にメンタルヘルスについて問題を抱える児童の早期発見のためのスクリーニングツールの作成とその効果判定をおこなう。

### **I メンタルヘルスに関して介入が必要とスクリーニングされた被災児童及び母親のケースの実態把握とフォローアップ**

同市において母子に関して多機関で密度の濃い介入が必要な複雑困難ケースが集まる虐待防止センター (以下同センター) の保健師をゲートキーパーとして、同センターだけでなく市役所の各部署からアセスメントや介入を依頼される児童および母親、家族についての実態調査を行った。

今年度相談内容については、子どものケースが8件、親のケースが8件、関係者会議に対するスーパービジョンが4件であった。うち、要保護児童対策地域協議会 (以下要対協) に関するケースが7件と約1/3を占めた。医療が必要と判断されたケースは2ケースで、そのほかにも保健師、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等の継続支援につながっている。

### **II メンタルヘルスに問題を抱える児童の早期発見に関するスクリーニング**

同センターがストレスを抱えて悩む子供たちの早期把握に努めることを目的に H25 年度より同市内の小学生に対して日常生活調査が開始となり、先行研究から継続してスクリーニングツール (修正版 QCD (自記式)) の作成と調査結果の分析を共同で行なってきた。これまで約1300名の児童を対象に調査を実施し、今年度も市内7小学校計960名に対して調査を行った。

生活上の困難度を表す総得点の平均は25年度35.1、平成26年度30.9、平成27年度30.7とより年々低下しており、震災からの経過の中で生活満足度が上がっている可能性が考えられた。また、今年度は相談を希望する児童と希望しない児童の総得点に差が見られ、さらに25年、26年の調査と同様生活全体の満足度 (学校・家庭) が相談希望の児童の方が有意に低い傾向にあるという結果が得られた。3年間の結果から、生活の全体的な満足度が問題を抱える児童のスクリーニングとして利用可能ではないかと考えられた。

カウンセリング希望のあった児童は7名 (男子3名、女子4名) で、学校での友人関係についてが5件、家族関係についてが2件であった。

### **III 同市における母子のメンタルヘルスに関するネットワークの構築**

母子のメンタルヘルスに関するネットワーク構築について、先行研究にて平成24年度に設置した同市学校教育課が主催の「石巻市子ども関係者会議」と要対協ケース会議の2つの会議に参加し、ケースに関するスーパービジョンを行いつつ、包括的なネットワークについて検討をおこなった。学校、行政各部署での連携への意識は年々高まってきており、ケースについての連携や役割分担もスムーズにとれるようになってきている印象がある。一方で、学校現場の教職員に対して連携の重要性や、連携の在り方についての普及啓発がなかなか進みにくいという課題が見えてきて、教育委員会での実務者研修で啓発のための講演や、直接学校に出向き研修を開催した。現地の医療スタッフのネットワークへの参加は実現せず、来年度の課題となった。

東日本大震災における被災児童の前向き追跡研究および被災児童の心的外傷後ストレス障害（PTSD）に関する研究-支援を行った被災児童の追跡研究-  
（渡部京太：NCGM国府台病院児童精神科）

- 1) 背景・目的：石巻市は東日本大震災の甚大な被害を受けた地域であるが、児童精神科医療の資源は乏しく、入院治療施設も少ない地域である。子どもの支援には、医療機関だけではなく、学校といった教育機関や児童相談所といった福祉との連携が不可欠である。東日本大震災に被災した児童を支援し、さらに追跡することを目的に平成24年度より「石巻市子ども支援関係者会議」を立ち上げた。「子ども支援関係者会議」の目的は、①石巻市の問題を抱える子どもへの支援を行うために、関係する諸機関が集まり、問題を抱える子ども、家族に関する情報交換を行い、よりよい支援を検討し、提供することである。
- 2) 「子ども支援関係者会議」は、月に1回開催する。ケースによって必要な関係者（児童相談所、石巻市内の小中学校、中中学校教諭、石巻市教育委員会指導主事・スクールソーシャルワーカー、石巻市健康推進課保健師、石巻市市民相談センター、石巻市虐待防止センター、国府台病院、精神・神経医療研究センター病院の児童精神科医、精神科医、ソーシャルワーカーなどが参加した。非行の問題に関しては、石巻警察署も参加することがあった。



- 3) 「子ども支援関係者会議」では、平成24年度は10事例、平成25年度は14事例、平成26年度は14事例について事例検討を行った。平成27年度は、8事例について検討し、さらに「子ども支援関係者会議」の今後のあり方についても検討を行った。平成27年度に「子ども支援関係者会議」で検討した事例の特徴として、次のようなことがあげられた。
- ①実際に被災した事例は8例中2例だった。震災後に問題が出現してきている事例が増えている一方で、被災した事例の問題の遷延化、深刻化がうかがわれた。
  - ②8例中3例では養育者の不適切や養育や身体的虐待を認め、児童相談所や虐待防止センターによる介入が必要と考えられた。
  - ③今後、特に養育機能の悪い家庭の不登校事例、そして虐待事例についての検討が増えていくことが予想される。
- 4) 「石巻市子ども支援関係者会議」の今後のあり方をめぐって「子ども支援関係者会議」への石巻市の精神科医や小児科医の参加を呼びかけ、「子ども支援関係者会議」のスーパーバイザーの役割をとれるように支援していく。またテレビ会議を行ってみて、遠隔地にいる助言者がスーパーバイズを行うことを試験的に試みしてみる。

# 「外傷体験を受けた子ども達における治療についての研究」

## TF-CBT ( Trauma-focused Cognitive Behavior Therapy ) の効果実証研究

### 【目的】

Deblinger, Cohen, Mannarinoらによって開発されたTrauma-Focused Cognitive Behavior Therapy(TF-CBT)は、欧米のいくつかのPTSD治療ガイドラインにおいて有効であるとされている。国際トラウマティック・ストレス学会 (International Society for Traumatic Stress Studies ISTSS, 2009)、米国児童青年精神医学会 (American Academy of Child and Adolescent Psychiatry, 2009) のガイドラインでは、子どものPTSD治療の第一選択であるとされており、英国・国立医療技術評価機構 (National Institute for Clinical Excellence NICE, 2005) も、性的虐待に対するTF-CBTの有効性を認めている。米国国立犯罪被害者研究治療センター (National Crime Victims Research and Treatment Center) と性暴力とトラウマティック・ストレスセンター (Center for Sexual Assault and Traumatic Stress) により発行されている「身体的性的被虐待児のための治療ガイドライン」では、さまざまな治療プログラムの中で唯一「十分支持される有効な治療法」として位置づけられている。また最近では、自然災害やテロの被害、DV被害や外傷性悲など、複合的な心的外傷を体験した子どもたちにも適応されており、効果が実証されている。しかし、TF-CBTのわが国での実践はまだほとんどなされていないのが現状である。

本研究では心的外傷における新しい治療をわが国において発展させるため、TF-CBTを実践しその有効性を検証するものである。

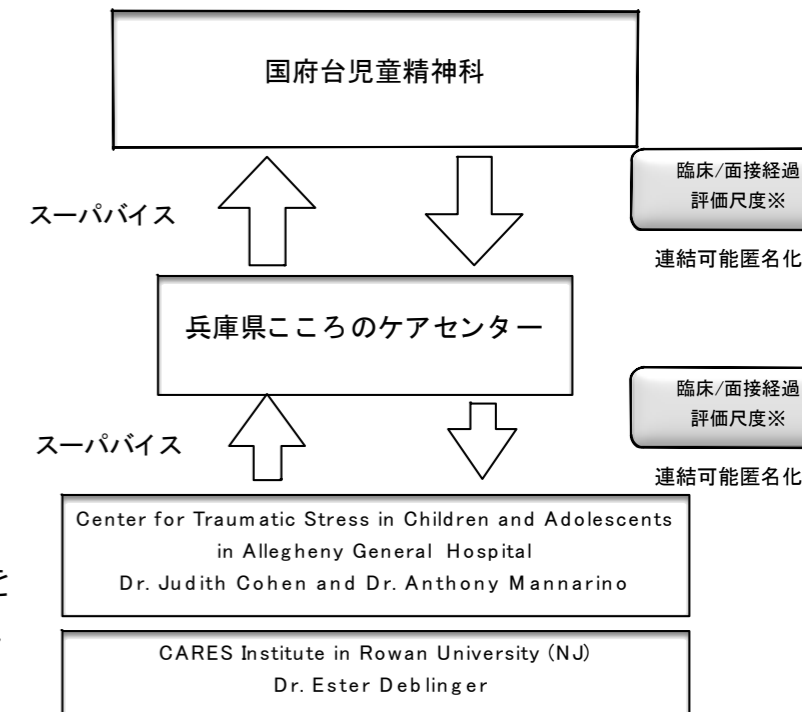
### 【方法】

米国国立子どものトラウマティック・ストレス・ネットワークが発行している「TF-CBT実践マニュアル」で推奨される方法で実施する。すなわち、治療マニュアルとして推奨されている「Treating Trauma and Traumatic Grief in Children and Adolescents」、およびWeb Training (TF-CBT web, <http://TF-CBT.musc.edu/index.php> 2005.) に基づいて本治療を実施する。

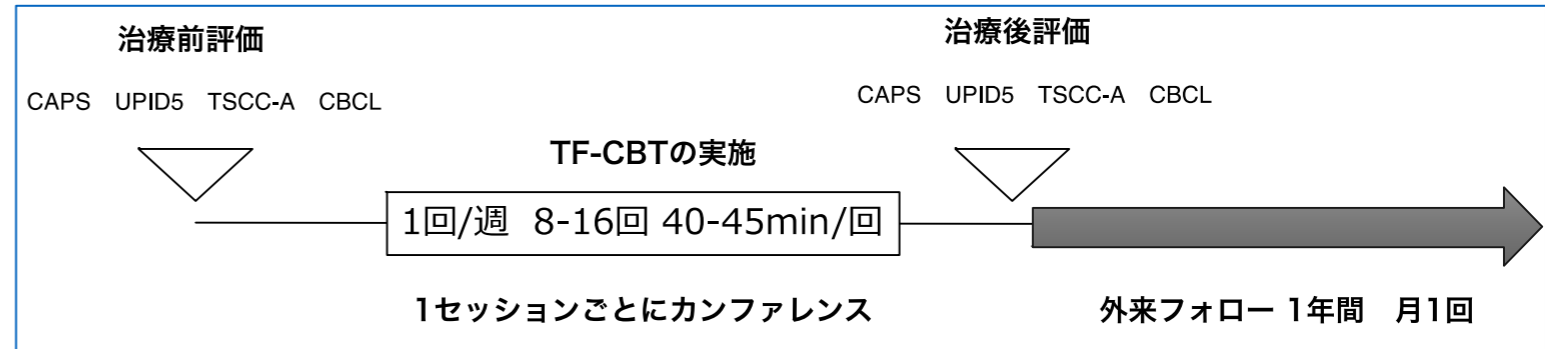
TF-CBTは心理的外傷体験をもつ子ども達の支援プログラムであり全体で8-16セッションを施行する。1セッション40-45分の治療時間を要する (TF-CBTに関する治療内容および治療の流れについては別添2資料を参照)。

尚本研究はプログラム開発者の一人であるDr.DeblingerからLive training (2011年7月、米国ニュージャージー州、CARES Institute(Child Abuse Research Education & Service)) を受け、わが国でTF-CBTの臨床実績のある兵庫県こころのケアセンター児童精神科 亀岡智美医師よりスーパーバイズが行われる。これはTF-CBTの治療をより正確かつ公正に行うためのものである。

その際には暗号化されたファイルで症例経過や面接記録を送信しSkypeなどでスーパーバイズを受ける。それに加えて、TF-CBTの開発者(Dr.Deblinger, Dr. Judith Cohen and Dr. Anthony Mannarino) らと緊密に連絡を取りながら、ケース進行中に必要に応じてスーパービジョンを受ける予定である。プログラム実施のすべての過程において、対象の安全に細心の注意を払い慎重に実施する。また治療終了後一年間の間月に1回程度のフォローアップを月1回の頻度で行う。



TF-CBT実施前後に次の評価尺度を適宜組み合わせて、PTSDおよび関連障害の症状改善度を評価する。以下の評価尺度をTF-CBT施行前と施行後にそれぞれ行う。①UPID(UCLA PTSD Index for DSM-IV)②TSCC-A (Trauma Symptom Checklist for Children-A) ③CBCL (Child Behavior Checklist) またセッション毎にSpence Children's Anxiety ScaleとBirlerson's depression self-rating scale for childrenを施行する



### 【現在の進行状況】

現在までにTF-CBTのIntroductory trainingを全受講者が受講を完了した。2015年9月に倫理委員会の審査を完了し、Peer consultationを開始している。2016年3月にWebConsultationを行った。

現時点で4症例を行っている(完了1例 中断2例 進行中1例)



### 【症例】

症例	年齢	入院/外来	性別	診断	トラウマの種別	UPID得点	進行状況
症例1	13歳	入院	女兒	複雑性PTSD 愛着障害	家庭内暴力の目撃 身体的虐待	49	PRACまで施行し一時中断
症例2	15歳	外来	女兒	複雑性PTSD	家庭内暴力の目撃 身体的虐待	34	完了
症例3	15歳	外来	女兒	PTSD	医療行為 スポーツ外傷	40	主治医異動のため一時中断
症例4	13歳	外来	男児	PTSD	自然災害 (地震)	34	進行中

研究発表及び特許取得報告について

課題番号： 27指1403

研究課題名： 東日本大震災における被災児童の前向き追跡研究および被災児童の心的外傷後ストレス障害 (PTSD) に関する研究

主任研究者名： 牛島洋景

論文発表

論文タイトル	著者	掲載誌	掲載号	年
Experiences with patient refusal of off-label prescribing of psychotropic medications to children and adolescents in Japan	Tsujii N, Saito T, Izumoto Y, <u>Usami M</u> , Okada T, Negoro H, Iida J.	Journal of Child and Adolescent Psychopharmacology 150623080349007		2015
子どものこだわりと強迫	宇佐美政英	こころの科学	184号、p44-48	
宮城県C市の子どものメンタルヘルス -中学生を中心に-	宇佐美政英	児童青年精神医学とその近接領域	56(4)592-600	2015
脳の発達、榎本哲郎編集看護学入門13精神看護	宇佐美政英	メヂカルフレンド社		2015
遺伝と環境、榎本哲郎編集看護学入門13精神看護	宇佐美政英	メヂカルフレンド社		2015
発達段階の課題、榎本哲郎編集看護学入門13精神看護	宇佐美政英	メヂカルフレンド社		2015
自我と防衛機制、榎本哲郎編集看護学入門13精神看護	宇佐美政英	メヂカルフレンド社		2015
ストレスの心身への影響、榎本哲郎編集看護学入門13精神看護	宇佐美政英	メヂカルフレンド社		2015
人間関係と心の健康、榎本哲郎編集看護学入門13精神看護	宇佐美政英	メヂカルフレンド社		2015
環境と心の健康、榎本哲郎編集看護学入門13精神看護	宇佐美政英	メヂカルフレンド社		2015
ライフサイクルにおける心の危機、榎本哲郎編集看護学入門13精神看護	宇佐美政英	メヂカルフレンド社		2015
発達障害、榎本哲郎編集看護学入門13精神看護	宇佐美政英	メヂカルフレンド社		2015
薬物療法	宇佐美政英	日本自閉症協会指導誌	通巻43号 かがやきNo12 P18-26	2015
子どものADHDの診断・治療に関するエキスパート・コンセンサス ー薬物療法編ー	牧野和紀, 齊藤万比古, 青島真由, 伊藤千晶, <u>岩垂喜貴</u> , <u>宇佐美政英</u> , 小平雅基, 渡部京太	児童青年精神医学とその近接領域	56(5) : 822-855	2015



研究発表及び特許取得報告について

Concerns Expressed by Parents of Children with Pervasive Developmental Disorders for Different Time Periods of the Day: A Case-Control Study	Sasaki.Y., <u>Usami.M.</u> , Sasayama. D., Okada. T., <u>Iwadare Y.</u> , <u>Watanabe.K.</u> , <u>Ushijima. H.</u> , Tanaka.T., Harada.M., Tanaka.H., Kodaira.M., Sugiyama. N., Sawa.T., Saito.K.	PLoS One	0124692	2015
関係者会議に携わって感じたこと	宇佐美政英, 佐竹直子, 渡部京太	集団精神療法	31(1),p11-20	2015.6.10
児童青年期患者に対する向精神薬の適応外使用についての意識調査	辻井農亜, 泉本雄司, 宇佐美政英, 岡田俊, 齊藤卓弥, 根来秀樹, 飯田順三	児童青年精神医学とその近接領域	56(2),220-235	2015
Long-Term Fluctuations in Traumatic Symptoms of High School Girls Who Survived from the 2011 Japan Tsunami: Series of Questionnaire-Based Cross-Sectional Surveys	<u>Masahide Usami</u> , <u>Yoshitaka Iwadare</u> , <u>Kyota Watanabe</u> , Masaki Kodaira, <u>Hirokage Ushijima</u> , Tetsuya Tanaka and Kazuhiro Saito	Child Psychiatry & Human Development An International Journal	Vol.47 No.1	2016
Psychological distress and the perception of radiation risks: the Fukushima health management survey.	<u>Suzuki Y.</u> , Yabe Y, Yasumura S, et al.	Bulletin of the World Health Organization	93:598-605.	2015
思春期医療 心の問題	田中徹哉 渡部京太	小児科臨床	68:2259-2264	2015
被災地の幼稚園での保護者を行ったグループについての報告	渡部京太	精神分析的臨床心理学	7:94-105	2015.7
『ぐるぐるグループ』を体験してみませんか？	渡部京太	集団精神療法	31(2):120-122	2015
Relationship between behavioral symptoms and sleep problems in children with anxiety disorders.	Iwadare, Y. et al.	Pediatrics international	official journal of the Japan Pediatric Society, 57(4)	2015 Aug

研究発表及び特許取得報告について

学会発表

タイトル	発表者	学会名	場所	年月
思春期男児を対象とした 携帯ゲームを中心とする集団精神療法 蛍の会	岩垂喜貴	第57回 小児神経学会	大阪	2015. 05. 18
Child and adolescent psychiatric intervention after the Great East Japan Earthquake and Tsunami	Iwadare, Y.	The 13th Asian and Oceania Congress of Child Neurology	New Taipei City, Taiwan	May 14-15, 2015

その他発表(雑誌、テレビ、ラジオ等)

タイトル	発表者	発表先	場所	年月日

特許取得状況について ※出願申請中のものは( )記載のこと。

発明名称	登録番号	特許権者(申請者) (共願は全記載)	登録日(申請日)	出願国

※該当がない項目の欄には「該当なし」と記載のこと。  
 ※主任研究者が班全員分の内容を記載のこと。